

## ベトナム語の漢文訓読研究を どのように進展させるのか

グエン ティ トゥー フエン  
NGUYEN THI THU Huyen

(富山大学大学院人文科学研究科修士課程)

漢文訓読は一般には日本語固有の現象と考えられてきたが、1970年代前後から日本語以外の漢字文化圏諸言語（中国語、朝鮮語、ベトナム語）にも同様の現象のあることが分かってきた。中国語と朝鮮語の漢文訓読については研究が進展し、具体的な研究成果が数多く公表されている。しかしベトナム語の漢文訓読については、関心を持つ研究者が少ないことに加え、いくつかの研究上の問題点があって十分には進んでいないように思う。

ベトナム語の漢文訓読について具体的に論じられるようになったのは2006年以降のことであるが、グエン・ティ・オワイン氏、岩月純一氏、小助川真次氏の三氏に限られる。オワイン氏は、李・陳王朝時代（11世紀～14世紀）に編纂された説話集『嶺南摭怪』の文体の中に、いわゆる変体漢文的要素が含まれていることを、岩月氏はベトナム語の漢文訓読現象を把握するためには、まず「訓読」概念を再検討する必要があることを、小助川氏は漢文を読む際に漢文本文に加点現象が起こることをそれぞれ論じた。

このように漢字文化圏の他の言語に比べて、ベトナム語の漢文訓読研究が十分に進展しないのはなぜなのか。その原因は、第一にベトナムの漢文資料の多くは阮朝時代（19世紀初～20世紀初）のものであって、それ以前の古い資料が現存せず、しかもそれらは未整理の状態のものが多く、研究者が原本に自由アクセスすることが難しいという資料的制約があること、第二に研究者の母語言

語が異なるために、日本人研究者とベトナム人研究者の漢文資料へのアプローチが異なり、漢文理解そのものが異なっている可能性があること、第三にこれまでの研究方法が文献資料の分析のみであって、実際にどのように読まれたのかという読者の内省にはまったく目が向けられていなかったことにあると考えられる。

発表者は、かつてのベトナムの科挙制度（～1919）のもとで中心的な教科書であった『論語』に焦点を絞り、実際の加点資料とベトナム語解釈資料である『論語約解』『嗣徳聖製論語釈義歌』などをベトナム語母語話者として分析するとともに、科挙世代のことを知りうる高齢者に直接インタビューするという方法を組み合わせて、ベトナム語の漢文訓読研究を進展したいと考えている。

# ジェンダーと歴史の語り方

## —平安・中世における和文の問題点

マクネリー キンバリー  
McNELLY Kimberly

(UCLA 大学院アジア言語文化学科博士後期課程  
早稲田大学文学学術院リサーチ・フェロー)

これまでは、歴史と和歌の関係について、『建礼門院右京大夫集』などを対象として研究を行ってきた。問題意識の中心には、「歴史」を語るのは誰か、そして、「歴史」を語るときにはどのような類型が想定されているかということ、さらには歴史を語る文学におけるジェンダーへの関心があった。はじめ日本の奈良・平安初期に編纂された六国史は漢籍の正史という先例に基づいていた。ここでは、男性作者が漢文で天皇の行為を中心にして、編年体で天皇の系譜ごとに記されている。しかしやがて、平安時代に和文が出現すると、女性が物語のような語り方を借りて、主君に関する話を語ろうとし始めた。父系を中心にした歴史から距離を置いて、女性の行動も歴史に入るテキストとしては、『栄花物語』が登場した。しかし、『栄花物語』が完成した後まもなく、それを書き換えた、『大鏡』が現れた。そこに、「鏡物」という男性作者が管理した和文で歴史を語るスタイルが生み出された。

本発表では、ジェンダー、書記文体（漢文か、それとも和文か）および歴史の語り方と、歴史を記すテキストとしての権威の交錯を考察する。平安・中世の歴史の現場において、漢文で「記す」か、和文で「語る」かというジェンダー間の対立を説明した上で、『土御門院女房日記』を事例研究として取り上げる。13世紀の『土御門院女房日記』は父後鳥羽院による承久の乱後、配流されて亡くなった土御門院を追悼するテキストである。その配流を語るころの表現は、和歌・和文による記述に限られている。これを検討しながら、女性が和文で歴

史を語る問題点を指し示したい。

# アメリカにおける川端康成『山の音』の翻訳と受容

ハヤカワ ユミコ  
早川 友実子

(早稲田大学大学院国際コミュニケーション研究科 博士後期課程)

Edward Fowler (1992) によれば、第二次世界大戦後のアメリカ（あるいは、英米を代表とする英語圏）において、谷崎潤一郎・川端康成・三島由紀夫ら「ビッグ・スリー」を中心とした日本人作家の作品群は、日本語圏の読者が想定する日本近代文学像とは異なる、横文字としての Modern Japanese Literature 像を形成した。

しかし、谷崎・川端・三島がアメリカの翻訳者に好んで翻訳され、アメリカの読者に好んで読まれたからといって、日本語圏における日本人作家像と、アメリカにおける日本人作家像が一致しているとは、必ずしも断言できない。例えば、アメリカの総合雑誌 *Atlantic Monthly* が別冊として刊行した日本特集号 *Perspective of Japan* (1954年) には、“In Praise of Shadows: A Prose Elegy by Tanizaki (陰翳礼讃：谷崎の哀歌的散文)” という題で谷崎潤一郎『陰翳礼讃』(1933-1934年) の抄訳が掲載されている。『陰翳礼讃』は日本語圏の研究者、とりわけ谷崎研究の研究者のあいだでは、その後の谷崎の日本回帰時代を示唆するマニフェスト的な文章と見なされる傾向があるが、訳者の Edward Seidensticker によって白人差別主義的な要素を削ぎ落とされた “In Praise of Shadows: A Prose Elegy by Tanizaki” は日本の伝統文化や芸術が失われることを嘆く保守的な芸術家の文章として読まれると同時に、当時のアメリカ人読者の日本像——例えば漆器、歌舞伎、着物、芸者などの物理的な実体を伴うイメージや、「光と陰の対比によって作られる審美的な『モノクロームの世界』に昔の日本人は生きていた」と述べる谷崎が体現するような、ユニークで風変わりな世界観を持つ日本人というイメージ——を肯定するという役割も担っていた。

本発表では、川端康成『山の音』の日本国内と英語圏（主にアメリカ）における作品評価の比較を通じて、第二次世界大戦後の、日本の文学作品の海外における受容を分析するためには、作家と作品（原著）の関係、翻訳者と作品（原著および訳書）の関係に加えて、訳書を取りまく環境や訳書の読者がどのような社会背景で暮らしているのかを意識し、区別する必要があるのではないか、という点について問題提起する。

# 桐野夏生作品をめぐる国際的な視座とその可能性

コマイ サチ  
駒居 幸

(筑波大学人文社会系 特任研究員)

現在、発表者は桐野夏生の作品について研究を行っており、2018年には桐野の『グロテスク』を対象とした論文を発表した\*1。本論文を書く中で、桐野作品は、国内に留まらず国外においても注目されており、桐野を取り扱った英語の学術論文が日本語の論文数を凌ぐ勢いで発表されていること、そして、国外においては日本国内とは異なる観点から研究が蓄積されていることが見えてきた。

そこで、本発表では、特に英語圏での桐野研究に着目をし、英語圏において桐野夏生はどのように受容され、どのような観点から研究をされてきたのか、また、国内の研究とどのような相違があり、その相違がどのように形成されたのか考察を行いたい。

桐野は江戸川乱歩賞を受賞した『顔に降りかかる雨』でデビューをしているが、国内の文学研究において、桐野作品はミステリーというジャンルに捉われない「文学」作品として取り扱われる傾向がある。また、桐野も、自身の作品がミステリーというカテゴリーに縛られないという主旨の発言をしている。

一方、英語圏において桐野作品は、2004年に『OUT』の英訳版がエドガー賞にノミネートされたことを契機に注目が高まり、他作品の英訳も進んだ。周知のとおり、エドガー賞はアメリカ探偵作家クラブが主催する賞であり、桐野の作品は英語圏において *mystery* や *crime novel* といった枠組みを通して受容されたのだといえる。こうした受容は、ジャパニーズ・ホラーやアニメ・マンガといったポップカルチャーなど、他の日本文化との影響関係の中で形成されていった。そのため、桐野作品は時に英語圏のミステリー作家と比較され、時に

日本のホラー作品と並列されるなど、多様な角度から研究が行われてきた。

英語圏において、桐野作品の分析は2000年代前半から行われており、10年以上の研究が蓄積されている。本研究では英語圏における桐野研究がどのように行われてきたのか、国内の研究と比較しながら整理し、国境を越えて学術的な関心を集める桐野作品の特質を明らかにしたい。

\*1 駒居幸 (2018)、「〈社会的な死〉を刻印された者たちへ —— 桐野夏生『グロテスク』における追悼のゴシップ」(『年報カルチュラル・スタディーズ』(6))、pp.81~101.

# 漱石の『趣味の遺伝』の実験工房について

タッ デイ マルコ  
TADDEI Marco

(バルガモ大学外国語外国文化学部日本語科日本語日本文学研究者)

私の文学研究の主たる対象は夏目漱石の小品である。修士論文で取り上げた『夢十夜』に続き、博士論文では短編集『永日小品』の中から特に洋画と日本画の影響、色を散りばめた文体と書齋における著者の生活の描写に焦点を当てて解明を試みた。場面を書齋に設定した漱石の作品の中には「文鳥」もあり、このアンティミズム風の小品に関しても日伊文化学会で発表を行った。2019年11月に初のイタリア語訳が出版される『漾虚集』の翻訳グループに携わりつつ、『趣味の遺伝』に興味を持つようになり、現在はこの作品におけるジャンルの扱い方について研究している。

簡単に言えば『趣味の遺伝』は日露戦争で戦死した「浩さん」と彼の墓参りに行っている無名の女性の間には芽生えた一種の一目惚れの原因についての叙述であるが、1906年に刊行されたこの短編小説の中にはいくつかの違うジャンルが介在し、その意味で実験的な作品と理解してもよいと思われる。

冒頭の狂気の神の命令を遂行する猛犬のイメージは戦争の非合理性を強調する幻想的な描写だと言えるであろう。また戦場で聞こえる「吶喊」の深い意味についての説明は哲学的な評論に近く、シェイクスピアの「マクベス」における滑稽と悲劇の対照についての脱線は比較文学的なエッセイのように見える。旅順の包囲攻撃の描写には映画的手法が用いられたように思われる。

更に、旅順の包囲攻撃で戦死した浩さんが書いた日記からの引用文は日本伝統文学の日記のジャンルに遡れるだろう。浩さんの墓参りに行った女性の素性について調べる叙述は、ある推理小説の捜査官を彷彿させる。最後に遺伝の理論を適用し、女性と浩さんの間の恋愛感情を彼らの祖先の間に起こった実らぬ

愛にたどり着く考え方は、小説というより科学の文献に近いように思われる。このように、短編小説にも拘わらず様々な文体と様式が混じり合い、翌1907年の「文学論」のような評論を予告すると同時に、推理小説的な雰囲気は1912年刊行の『彼岸過ぎまで』の最初のページを思い起こさせる。『趣味の遺伝』は漱石にとっての実験工房であったかのようだ。

## ポスターセッション題目

横溝正史『執念』の考察——影響受容関係から独自のテーマへ——

<sup>パ ク</sup> <sup>ヨ ン ソ ン</sup>  
PARK Yeongseon (二松学舎大学大学院博士後期課程)

浪人のテキスト：忠臣蔵、クロスメディア化と江戸時代のファンサービス文化

<sup>フ ォ ー リ ー</sup> <sup>ア リ シ ア</sup>  
FOLEY Alicia (ウイスコンシン大学マディソン校博士課程

神戸女学院大学留学生・研究者)

軍記物語における「人間」の語の用例について

<sup>ヨウ</sup> <sup>キン</sup>  
楊 琴 (奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻

日本アジア文化情報学講座博士後期課程)

坂口安吾「Pierre Philosophale」考——神秘性と〈分身〉——

<sup>フジタ</sup> <sup>エリカ</sup>  
藤田 絵理香 (埼玉大学大学院人文社会科学研究所

博士後期課程)

